

# Miscellanea curiosa 創刊号(1670)の報告者 および主題の分析

安西 なつめ

**Natsume ANZAI.** Analysis of Authors and Subjects in First Issue of *Miscellanea Curiosa* (1670). *Studies in International Relations* Vol.41, Consolidated Edition. February 2021. pp.61-68.

This study examines the characteristics of *Miscellanea curiosa, sive ephemeridum medico-physicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum* (1670–), one of the first medical and scientific journals published in Europe.

This journal was launched by Academia Naturae Curiosorum, founded by Johann Laurentius Bausch (1605–1665), Johann Michael Fehr (1610–1688), Georg Balthasar Metzger (1623–1687), and Georg Balthasar Wohlfarth (1607–1674) in 1652.

The subjects of the 160 articles published in the first issue can be categorized into pathology (31%), physics (29%), anatomy (20%), therapy (8%), botany (6%), surgery (4%), chemistry (1%), and mathematics (1%). Compared to other journals published in Paris and London in the era, it is characterized by a large number of articles on medicine. *Miscellanea curiosa* is a collection of knowledge and experience from doctors in various cities, including Gdansk, Augsburg, and Rome. The present result suggests that this journal embodied the academy's purpose of sharing medical knowledge and making it available to people.

## はじめに

*Miscellanea curiosa, sive ephemeridum medico-physicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum* (以下、『医学自然学報』) (1670–) は、西洋において医学、自然科学分野に重点を置いた最初の学術雑誌である。

17世紀西洋では、この『医学自然学報』に先立ち、フランスの『ジュルナル・デ・サヴァン Journal des savants』(1665–) やイギリスの『フィロソフィカル・トランザクションズ Philosophical Transactions』(1665–) などが刊行されていた。しかし前者は自然科学分野に加え、学問全般、その他歴史や宗教などに及ぶ広範な報告を含むという点で、『医学自然学報』とは性質が異なる。また後者は自然科学分野の報告に重点を置いた科学雑誌の先駆とされるが、各国の書籍の紹介や書評も多く、大部分が医学関係の報告から

なる『医学自然学報』とはやはり性質が異なる。『ジュルナル・デ・サヴァン』や『フィロソフィカル・トランザクションズ』に関してはこれまでも多方面から研究が蓄積されてきた一方、その5年後に創刊された『医学自然学報』に関しては、母体となったアカデミーの創設、および雑誌自体の先駆性に焦点をあてた研究<sup>1</sup>、あるいは、収録された報告のうち特定の病態に関する記述への言及はあるものの<sup>2</sup>、創刊当時の雑誌の性質や報告内容の傾向に関する詳細な分析は見られない。

本稿では『医学自然学報』を医学史および科学史上に位置づける前段階として、同報の創刊号(1670年)に掲載された160題の報告を対象に、報告者および主題を分析した。またこの分析を通し、創刊時の雑誌の特徴と傾向をアカデミーの活動目的に照らして明らかにした。

## 1. 17世紀ドイツ（神聖ローマ帝国）における 学術の動向

はじめに、『医学自然学報』の背景として、17世紀ドイツ（神聖ローマ帝国）における学術活動を整理する。

1618年から1648年までの間、ボヘミア（ベーム）での反乱を皮切りに、ドイツ（神聖ローマ帝国）を中心とする30年戦争が勃発した。同国は当時、バルト海・北海の海岸からアルプスに至るヨーロッパ大陸を統べていたが<sup>3</sup>、その後、この戦争による疲弊と気候の寒冷化などを背景に、弱体化と分裂が進んだ。

この間の学術活動として、1622年にヨアヒム・ユンク（Hachim Jung, 1587-1657）がロストックに探究協会（Societas ereunetica sive zetetica, 1622-ca. 1642）を設立した。ユンクはロストック大学とルートヴィヒス大学ギーゼン（Ludwigs-Universität Gießen）で学び、ルートヴィヒス大学ギーゼンで数学の教授となった。その後ユンクはロストック大学、パドヴァ大学で医学を学び、学位を得て、ロストック大学で数学を、ヘルムシュテット大学で医学などを教えた。探究協会はドイツで最初の学術団体と見なされているが、この会は1642年頃に活動を停止したようである<sup>4</sup>。

30年戦争終結後の1652年には、シュヴァインフルトに、ヨハン・ラウレンティウス・バウシュ（Johann Laurentius Bausch, 1605-1665）、ヨハン・ミヒャエル・フェール（Johann Michael Fehr, 1610-1688）、ゲオルク・バルタザール・メッツガー（Georg Balthasar Metzger, 1623-1687）、ゲオルク・バルタザール・ヴォールファールト（Georg Balthasar Wohlfarth, 1607-1674）の4人によって、Academia Naturae Curiosorumが創設された。バウシュが初代会長となった。このアカデミーが『医学自然学報』の母体である。同アカデミーはその後1687年に神聖ローマ帝国皇帝レオポルド1世（Leopold I, 在位1658-1705）の庇護を受けて活動を続けた<sup>5</sup>。

また、1672年にはアルトドルフ大学の数学教授ヨハン・クリストフ・シュトルム（Johann Christoph Sturm, 1635-1703）が、好奇心のあ

るいは実験的コレギウム（collegium curiosum sive experimentale）を組織し、『実験的あるいは好奇心のコレギウム Collegium experimentale: sive curiosum』（1676-1685）を出版した。この『実験的あるいは好奇心のコレギウム』では、各種の実験装置を使用した光学や水力学などに関する実験結果が報告された<sup>6</sup>。この後、1700年になると、ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）によってブランデンブルグ選帝侯立科学協会（Kurfürstlich Brandenburgische Societät der Wissenschaften）が創設された<sup>7</sup>。

17世紀にはイタリアにおいて、1603年にアカデミア・デイ・リンチェイ（Accademia dei Lincei, 山猫アカデミー）がローマに、1657年にアカデミア・デル・チメント（Accademia del Cimento, 実験アカデミー）がフィレンツェに創設された<sup>8</sup>。またイギリスでは1662年にロンドン王立協会が、フランスでは1666年にパリ王立科学アカデミーが創設された。各国で次々とアカデミーが創設された時代に、ドイツ（神聖ローマ帝国）内ではイタリアに続き、早くから小規模なアカデミーが設置されていたのである。

## 2. アカデミーの創設と『医学自然学報』の刊行

アカデミーの創設に関してはすでに多くの先行研究がある。ここではアカデミーの性質を把握するため、4人の創設者とアカデミーの目的について触れるに留める。

初代会長のバウシュは、イエナやパドヴァで医学を学んだ後、アルトドルフ大学で学位を取得し、シュヴァインフルトで医師として活動した。フェールはライプツィヒ、ヴィッテンベルク、アルトドルフで学び、1641年にパドヴァで医学の博士を取得してシュヴァインフルトに戻り、医師として活動した。彼はバウシュの後、1666-1686年の期間アカデミーの会長を務めた。メッツガーはアルトドルフ、ヘルムシュテット、ライプツィヒで学び、また国外ではパドヴァ大学で外科学や解剖学を学んだ。イエナ大学で学位を得た後は1650年にバーゼル大学で医学の博

士を取得し、以後は一時期シュヴァインフルトに戻って医師として活動したが、アカデミー創設の同年 1652 年にはルートヴィヒス大学ギーゼンの医学教授となった。1661 年以降はチュービンゲン大学で解剖学、植物学を教え、後年はチュービンゲン大学植物園の園長をつとめた。ヴォールファールトはアルトドルフ、ストラスブール、バーゼルの大学で医学を学んだ。アルトドルフ大学に戻り博士を取得した後は、シュヴァインフルトで医師として活動した。

アカデミーが創設されたシュヴァインフルトや、4 人の創設者たちが学んだアルトドルフ大学は、ドイツ (神聖ローマ帝国) 内で、現在のチェコ、オーストリアに近い南方に位置する。16-17 世紀における医学興隆の地としては、パドヴァ、ライデン、バーゼル、パリ、ロンドンなどの諸都市が知られているが、シュヴァインフルトではそれまで目立った活動が見られなかった。4 人は国内の大学のほか、パドヴァやバーゼンに出て学んだ。たとえばメッツガーとヴォールファールトが学んだバーゼンは、近代医学の幕開けとなったヴェサリウス (Andreas Vesalius, 1514-1564) の『ファブリカ De humani corporis fabrica libri septem』(1543) が出版された地であるが、彼らが学んだ 1630-50 年頃は目立った活動が見られなかった。またバウシュ、フェール、メッツガーが学んだパドヴァ大学は、16 世紀中葉から後期に解剖学研究の中心となった大学である。この頃にはヴェサリウスが解剖学教授をつとめ、著名な医学者を輩出し、また国外から多くの学生を受け入れていた。バウシュ、フェール、メッツガーが学んだ 1630-50 年頃にはドイツ生まれのヴェスリング (Johann Vesling, 1598-1649) が解剖学と外科学、後には植物学の教授を務めていた。当時、教養や専門的な知識を身につけるため国外をまわることが珍しくなかった。創設者の 4 人はそれぞれ、国外の諸都市をまわって医学を学び、また学位を取得するなどして専門的知識をシュヴァインフルトに持ち帰ったと考えられる。

同アカデミーは当初、地方における少数の医師の組織として始動した。このアカデミーが刊行した『医学自然学報』では、鉱物、植物、動物に

関する報告が重視された<sup>9</sup>。創刊号 (1670) の巻頭に置かれた諸国の医師に向けた言葉の中では、鉱物、植物、動物に関する研究が医術に役立つとされ、また「隣人の健康」を目指すアカデミーの活動は「誠実な honestus」、「好奇心の強い curiosus」、「有用な utilis」などの語で表された<sup>10</sup>。アカデミーによる活動と雑誌の刊行には、医学に関する知識を集積し人々の健康に役立てるという目的があったようである<sup>11</sup>。

### 3. 『医学自然学報』創刊号 (1670) の傾向と特徴

『医学自然学報』は、アカデミーの創設から 18 年を経た 1670 年から刊行され始め、幾度か名称を変更しながら現在も学会誌として継続している。Miscellanea curiosa, sive ephemeridum medico-physicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum の名称が使用されたのは 1670 年から 1706 年までに刊行された 24 巻である。おおよそ 1 年に 1 冊の頻度で刊行されたが、年によっては 2-4 年ほどの期間が空く場合もあった。

創刊号の構成は以下の通りである。

- 口絵 1
- タイトルページ
- 口絵 2
- 標題紙
- レオポルド 1 世への献辞
- 報告者一覧
- 報告の目次
- 諸国の医師に向けた言葉
- 巻頭の言葉
- 報告 (160 題)
- 注記
- 巻末の言葉
- フランチェスコ・レディ (Francesco Redi, 1626-1697)<sup>12</sup> のロレンツォ・マガロッティ (Lorenzo Magalotti, 1637-1712)<sup>13</sup> 宛ての報告 (ラテン語訳)<sup>14</sup>
- 付記
- 索引

### 3-1. 報告者の傾向と特徴

本稿では創刊号（1670）に収録された160題の報告を分析した。各報告には観察（observatio）の語が用いられており<sup>15</sup>、観察1、観察2と続く。報告には論考の形式がとられているものから、ごく簡潔な数行の短報や紹介もある。また、報告によっては、内容に関して編集者による注釈が付されている場合もある。

報告者は36人で、1人あたり複数題を報告した者も多い。報告数にはやや偏りがあり、5題以上の報告がある人物をまとめた（図1）。多くがこれまで医学史上で取り上げられる機会が少なかった各地の医師である。以下で簡単に素描する<sup>16</sup>。

160題中14題を報告したPhilipp Jakob Sachs von Löwenheim（1627-1672）はライプツィヒ、モンペリエ、パドヴァなどで学んだヴロツワフ（Wrocław：現ポーランド）の医師である。『医学自然学報』の最初の編集者で、報告に付された注記・注釈の大部分を担った。雑誌の刊行と医学者間のネットワークの構築に貢献したと考えられている<sup>17</sup>。続いて13題を報告したトマス・バルトリン（Thomas Bartholin, 1616-1680）はコペンハーゲン大学教授でデンマークのクリスチャン5世（Christian V, 在位1670-1699）の侍医である。同じく13題を報告したChristianus Frider Garmannus（1640-1708）はマイセンの医師でアカデミーの会員である。12題を報告したAlhardus Hermannus Cummius（生没年不

詳）はブラウンシュヴァイク公爵夫人の医師である。10題を報告したGeorg Hieronym Velschius（1624-1677）はアウクスブルクの医師である。9題を報告したJohann Georg Greiselius（1620-1684）はウィーン大学解剖学教授でアカデミーの会員である。8題を報告したJoach Georg Elsnerus（生没年不詳）はヴロツワフの医師でアカデミーの会員である。同じく8題を報告したGeorg Sebastianus Jungius（生没年不詳）はウィーンの医師でアカデミーの会員である。7題を報告したValent Andreas Moellenbroccius（1623-1675）はハレの医師でアカデミーの会員である。6題を報告したJohannis Ferdinand Hertodius（生没年不詳）はモラヴィア（moravia：現チェコ東部）の医師でアカデミーの会員である。同じく6題を報告したGeorg Seger（1629-1678）はライプツィヒなどで医学を学んだ後、コペンハーゲンのトマス・バルトリンの下で学び、1660年にバーゼルで医学の学位を取得した。その後グダニスク（Gdańsk：現ポーランド）に移り、ポーランド王の侍医となった。5題を報告したJacobus Johannes Wenceslaus Dobrzensky（1623-1697）はプラハ大学の教授である。同じく5題を報告したGiovanni Guglielmo Riva（1627-1677）はローマのサンタ・マリア・デッラ・コンソラツィオーネの病院の外科医であり、解剖の講義やリンパ管の研究を行った。

以上から、同報ではアカデミーの会員、非会員に関わらず報告が掲載されたことが分かる。また

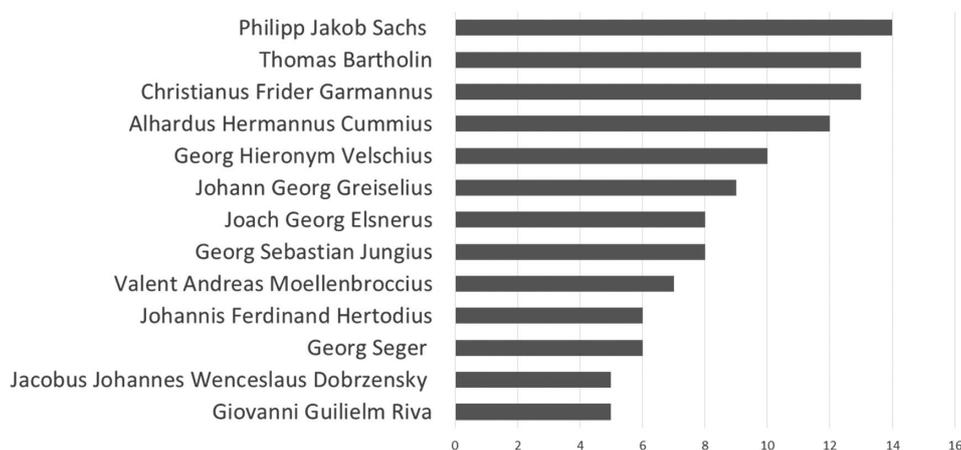


図1 Miscellanea curiosa 創刊号（1670）における報告数の多い人物  
Miscellanea curiosa（1670）より作成

最も多く報告したのは Philipp Jakob Sachs von Löwenheim であり、自身の報告に加え注釈を担っていたことから、この雑誌における役割の大きさが伺い知れる。

報告はしばしば別の人物を介し、アカデミーの会員に書簡の形式で届けられた。各報告には、報告者、書簡の受取人、注釈者が明記された。また、報告者はウィーン、グダニスク、モラヴィア、プラハ、ローマ、コペンハーゲンなどの各地の医師や大学教授であった。アカデミーの活動が広域に及んでいたことが分かる。

報告者のうち、特筆すべき人物として、トマス・バルトリンが挙げられる。トマス・バルトリンは同時期の著名な解剖学者であり、父カスパー・バルトリン (Caspar Bartholin the Elder, 1585-1629) の解剖学書をもとにした『改新解剖学 Anatomia reformata』(1641) が各国語に訳されて教科書として利用されたほか、リンパ管の研究などにより、国内外に知られていた。同時期のデンマークにはまだアカデミーが設置されておらず、学術関係の定期刊行物も刊行されていなかった。バルトリンは観察および研究結果を、医学、自然学に重点を置いた『医学自然学報』を通していち早く報告したものと考えられる。このほか2題のみであるが、ライネル・デ・グラーフ (Reinier de Graaf, 1641-1673) による報告が含まれる。グラーフはオランダの医師で1672年の著作『女性生殖器の新論考 De mulierum organigenerationi inservientibus tractatus novus』(1672) において、グラーフ卵胞と呼ばれる構造を発見した。『医学自然学報』には「硬化した頸動脈」<sup>18</sup>、「奇形の子宮」<sup>19</sup>を報告している。

報告者の分析によって、報告者がグダニスク、アウグスブルク、マイセン、ウィーン、ローマなどの諸都市の医師であり、報告数には偏りがあったことが分かった。

### 3-2. 報告主題の傾向と特徴

次に、主題の傾向と特徴を分析した。創刊号(1670)には、報告の目次および本文欄外注に各報告の分野が記載されている<sup>20</sup>。この記載に基づ

くと、報告は病理学 pathologia、自然学 physica、解剖学 anatomica、治療学 therapeutica、植物学 botanica、外科学 chirurgica、化学 chymica、数学 mathematica の8分野に分類される。ただし160題中12題は解剖・病理や、病理・治療など2つの分野にまたがる。本稿では雑誌全体における報告の傾向と性質を把握するため、同一論文で複数分野にまたがるものは双方に含めた。

創刊号(1670)の報告の内訳は、病理学53題(31%)、自然学50題(29%)、解剖学34題(20%)、治療学13題(8%)、植物学11題(6%)、外科学7題(4%)、化学2題(1%)、数学2題(1%)だった。

具体的な報告内容として、病理学の分野では腸の閉塞、水頭症、血尿など多様な症例が報告されている。また自然学の分野では、様々な人物による顕微鏡観察の結果をまとめたものや鉱物に関する報告などに加え、セイレーンに関する記述や不可思議な現象の紹介なども見られる。主として自然学全般に関する内容が扱われた。解剖学の分野では結合双生児や肺病の男児の解剖結果などが報告されている。また治療学の分野ではかゆみや瘰癧るいれきの治療について、植物学の分野では、コケやアロエのほか、日本のタバコに関する報告もある。

既述の通り、同アカデミーでは、鉱物、植物、動物を重視することが表明されていたが、『医学自然学報』では報告者である医師自身が診断、処置、治療、解剖した例や、それらを見聞きした報告が多数を占めていた。これは、医術の研究とその実用というアカデミーの目的に沿ったものと考えられる。特に病理的な内容に関する報告が多く、症例が図版を用いながら詳細に記述されている点は、同報の顕著な特徴である<sup>21</sup>。

### おわりに

本研究では『医学自然学報』創刊時の性質と傾向を明らかにした。収録された報告の内訳と内容からは、『医学自然学報』が間違いなく西洋における最初の医学・自然学系の学術雑誌であったことが確認される。雑誌の特徴としては、各報告に

病理、解剖など、該当する分野が記載されている点が挙げられる。内容に関しても、書評を多く取り入れていた『ジュルナル・デ・サヴァン』や『フィロソフィカル・トランザクション』とは異なり<sup>22</sup>、医師が実際に経験した、あるいは見聞した病態、治療の方法と経過、解剖結果などが観察 (observatio) として集積された。また報告は各都市の医師から寄せられ、医師たちが広範囲に情報を交換していたことが読み取れる。

報告者の中には著名な医学者も含まれ、たとえばトマス・バルトリンによる報告が収録されている点からは、同時期のヨーロッパに及ぼしたバルトリンの影響の大きさが知られる。また一方で、バルトリンにおける『医学自然学報』の影響という点も重要である。周辺諸国と同様、バルトリンが活動したデンマークでも、17世紀後期は解剖学発展の時期であり、バルトリンは当地で最も影響力のある解剖学者だった。バルトリンは『医学自然学報』創刊の3年後、北ヨーロッパ諸国で最初の学術雑誌『コペンハーゲンの医学・哲学紀要 Acta medica et philosophica Hafniensia』(1673-1680)を刊行した<sup>23</sup>。この雑誌はおおよそ2年に1冊の頻度で全5巻刊行されたが、バルトリンの死後は刊行が継続しなかった。『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』では、全5巻に収録された収録論考の66%が医学関係の論考および報告であり、両雑誌には類似が見られる<sup>24</sup>。バルトリンも報告を寄せた『医学自然学報』の創刊が、『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』の創刊に影響したことが推察される。

17世紀には、各国において学術雑誌の創刊が相次いだ。ドイツ(神聖ローマ帝国)における『医学自然学報』の創刊もこうした潮流の一端とみなすことができる。各アカデミーにおいて雑誌刊行の意図は様々であったが、『医学自然学報』の創刊は、医師間で広く知識を共有し、医術を研究して一般の人々の健康に役立てるといったアカデミーの目的を体言するものであったと言える。

## 謝辞

本発表は、科学研究費補助金による成果の一部です。

研究課題：17世紀における医学自然学雑誌の創刊に関する比較研究

課題番号：20K12908

研究代表者：安西なつめ

## 注

- 1 Rebohm, S. 2019, 木本忠昭. 2008
- 2 Bates, A.W. 2003, Kompanje, E. J. O. 2004
- 3 当時神聖ローマ皇帝レオポルド1世は、ハンガリー王(在位1655-1705年)、ボヘミア王(在位1657-1705年)、オーストリア大公(在位1657-1705年)として同地をおさめていた。
- 4 Dickson, Donald R. 1998. p. 93.
- 5 アカデミーはその後幾度か改称し、2007年以降は国立科学アカデミー・レオポルディーナ(Nationale Akademie der Wissenschaften Leopoldina)として活動しており、現存する世界で最も歴史あるアカデミーの一つとなっている。現在は30か国以上1600名程の会員数で、活動は自然科学の多様な分野に及ぶ。国立科学アカデミー・レオポルディーナ HP：  
<https://www.leopoldina.org/leopoldina-home/>  
(2020年10月29日閲覧)
- 6 Sturm, J. C. 1676-1685
- 7 ライプニッツはこの協会の創設にあたり、「諸学と諸技芸の協会を設立する構想」を著し、この協会は「単なる珍奇または好奇心や不毛な実験に向かったり、あるいはパリ、ロンドン、フィレンツェなどで起きているように、有益な物を単に発明するだけで応用や実用を欠き…人々が手を引いてしまう、というのであってはならない。」と述べている。G・W・ライプニッツ, 酒井潔, 佐々木能章(監訳). 2018, p. 485. 注03にあるように、パリ、ロンドン、フィレンツェとはそれぞれ、パリ王立科学アカデミー、ロンドン王立協会、アカデミア・デル・チメントのことを指している。

- 8 イタリアではすでに 16 世紀から、アカデミア・セクレトルム・ナチュラエ (Academia Secretorum Naturae、自然の秘密学会、1560) など、アカデミアと名のつく集会や会合が開かれていた。各国における学術活動の開始と雑誌の創刊に関しては、金子務, 2005 を参照。
- 9 同報の口絵にも、鉱物、植物、動物の文字が刻まれ、3つの領域を表すモチーフが描かれている。
- 10 Deutsche Akademie der Naturforscher. 1670, p. 6.
- 11 刊行の目的に各地の研究者間の交流が意図されていたことも指摘されている。Rebohm, S. 2019
- 12 ハエなどの自然発生説に対する反証実験で知られる。
- 13 アカデミア・デル・チメントの秘書で、アカデミーの実験論文集「サッジ Saggi」(1666) を手掛けた。
- 14 毒蛇の観察 Osservazioni intorno alle vipere(イタリア語原題) Redi, F. 1664
- 15 observatio の語は医学の分野において 1560 年代頃から、個別の観察や症例の意味で使用され始める。Daston, L, Lunbeck, E. 2011, p. 53.
- 16 各報告者の情報は、『医学自然学報』の報告者一覧 (syllabus, 頁番号なし)、個々の著作や論考、国立科学アカデミー・レオポルディーナ HP 内の会員検索 (Mitglieder seit 1652 : <https://www.leopoldina.org/mitglieder/mitglieder-seit-1652/>) (2020 年 11 月 2 日閲覧) などを使用して得た。
- 17 Sachs の伝記的な情報と、アカデミーの創立における彼の役割については Girlich, H. -J. 2012 が詳しい。
- 18 Graaf, R. 1670a
- 19 Graaf, R. 1670b
- 20 目次と本文欄外注の記載が異なる場合がある。どちらにも記載がある場合は内容に照らしながら本文欄外注の記載を採用した。また欄外注に記載がない場合は目次の記載を採用した。
- 21 『医学自然学報』初期の病理学関係の報告とそ

の図版に関しては、Conforti, M. 2015 が詳しい。

22 柴田和宏, 2015 を参照。

23 『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』における収録論考の主題とその内訳に関する分析については安西なつめ, 2019a を参照。

24 安西なつめ, 2019b を参照。

## 参考文献

- Ball, P. Curiosity: How Science Became Interested in Everything. Chicago, London: University of Chicago Press; 2014
- Bates, A. W. Autopsy on a Case of Roberts Syndrome Reported in 1672: The Earliest Description? American Journal of Medical Genetics. 2013; 117A: pp. 92-96.
- Brodman, E. The Development of Medical Bibliography. Baltimore: Medical Library Association; 1954
- Conforti, M. Illustrating Pathologies in the First Years of the Miscellanea Curiosa 1670-1687. Nuncius. 2015; 30: pp. 570-609.
- Deutsche Akademie der Naturforscher. Miscellanea curiosa medico-physica Academiae Naturae Curiosorum; sive, Ephemeridum medico-physicarum germanicarum curiosarum Annus primus anni scilicet M. DC. LXX. Lipsiae, Sumpt. V.J. Trescheri; 1670
- Deutsche Akademie der Naturforscher. Miscellanea curiosa medico-physica Academiae Naturae Curiosorum; sive Ephemeridum medico-physicarum Germanicarum curiosarum annus secundus. Jenae, Sumptibus E. Fellgibeli, typis S. Krebsii; 1671
- Dickson, Donald R. The Tessera of Antilia: Utopian Brotherhoods and Secret Societies in the the Early Seventeenth Century. Leiden, Boston: Brill; 1998
- Evans, R. J. W. and Marr, A. (eds.) . Curiosity

- and Wonder from the Renaissance to the Enlightenment. Routledge; 2017
- Girlich, H.-J. Philipp Jacob Sachs von Lewenhaimb (1627–1672) und die Leopoldina. in *Schlesische Gelehrtenrepublik*, Vol. 5, Dresden-Wroclaw; 2012 S; pp. 193-208.
- Graaf, R. *Arteriae carotides induratae*. in *Miscellanea curiosa medico-physica Academiae Naturae Curiosorum; sive, Ephemeridum medico-physicarum germanicarum curiosarum Annus primus anni scilicet M. DC. LXX*. Lipsiae, Sumpt. V.J. Trescheri: 1670a; pp. 285-286.
- Graaf, R. *Monstrosus uterus*. In *Miscellanea curiosa medico-physica Academiae Naturae Curiosorum; sive, Ephemeridum medico-physicarum germanicarum curiosarum Annus primus anni scilicet M. DC. LXX*. Lipsiae, Sumpt. V.J. Trescheri: 1670b; pp. 286-288.
- Holstein, A. *Scholars in action. The practice of knowledge and the figure of the savant in the 18th century*. 2 vols. Leiden: Koninklijke Brill NV; 2013.
- Jarcho, S. Problems of the autopsy in 1670 AD. *Bulletin of the New York Academy of Medicine*. 1971; 47 (7) : pp. 792-796.
- Kompanje, E. J. O. The First Successful Separation of Conjoined Twins in 1689: Some Additions and Corrections. *Twin Research and Human Genetics*. 2004; 7 (6) : pp. 537-541.
- Mücke, M, Schnalke, T. *Briefnetz Leopoldina: die Korrespondenz der Deutschen Akademie der Naturforscher um 1750*. Berlin, New York: NY de Gruyter; 2009
- Rebohm, S. Knowledge, Community and Authority at the Academia Naturae Curiosorum, in Pietro Daniel Omodeo, *Natural Knowledge and Aristotelianism at Early Modern Protestant Universities*. Volkhard Wels (Hg.): Harrassowitz; 2019. pp. 299-314.
- Redi, F. *Osservazioni intorno alle vipere*. Firenze Insegna della Stella Göttingen Niedersächsische Staats-und Universitätsbibliothek; 1664
- Sturm, J.C. *Collegium experimentale: sive curiosum*. Nürnberg: W.M. Endter; 1676-1685
- 安西なつめ. 『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』における収録論考の主題と傾向: 日本医史学雑誌. 2019a; 65 (2) , p. 202.
- 安西なつめ. 17世紀デンマークにおける医学の展開—北欧で最初の公開解剖施設の設置と医学系雑誌の刊行—: 北欧史研究. 2019b; 36, pp. 21-36.
- 金子務. オルデンバーガー十七世紀科学・情報革命の演出者. 東京: 中央公論新社; 2005
- 木本忠昭. 現存ドイツ最古医学自然科学アカデミー「レオポルデーナ」: ドイツの科学アカデミー. その(1)学術の動向. 2008; 13(1), pp. 80-85.
- 坂井建雄. 人体観の歴史. 東京: 岩波書店; 2008
- 柴田和宏. 刊行初期のフィロソフィカル・トランザクションズ. 科学史研究. 2015; 275, pp. 233-239.
- ライプニッツ, G. W. 酒井潔, 佐々木能章 (監訳). ライプニッツ著作集 第II期 3] 技術・医学・社会システム—豊饒な社会の実現に向けて—. 東京: 工作舎; 2018